企画展 「因幡伯耆の中世城館」　展示解説シート

伯耆の中世城館

伯耆（鳥取県中西部）地方には、大山山麓や東郷池、平野など多様な地形に合わせ、多くの城館跡があります。今回の展示では山陰道の発掘調査成果によりみえてきた居館の姿、険しい山岳を利用した城、伯耆山名氏ゆかりの遺跡、東伯耆を代表する国人南条氏の居城を題材に城館の変遷を紹介します。

【協力いただいた関係機関】

倉吉博物館・湯梨浜町教育委員会・琴浦町教育委員会・足利市教育委員会・千早赤阪村

○城郭の変遷をたどる

鎌倉時代

鎌倉時代以降、集落の一画を溝によって区画した領主の屋敷が各地に登場します。やがて屋敷の中から四周に塀をめぐらせ、堀や土塁によって防御した方形館があらわれます。鎌倉時代末から南北朝期には、合戦時に高くて険しい山を天然の要害とする山城（例：千早城）が登場します。険阻な山中に築かれた山岳寺院も一時的に城として利用されました。

（参考）国史跡　千早城
（写真提供：千早赤阪村）

室町時代

室町時代には国ごとに置かれた守護が政庁として守護所を領国内に設けます。守護所は室町幕府の花の御所がモデルとなったといわれますが、単なる屋敷ではなく外周の土塁や堀を強化し、防御力を高めた方形館の形（例：足利氏宅跡）をとっていました。

（参考）国史跡足利氏宅跡（鑁阿寺）：中央右
（写真提供：足利市教育委員会）

戦国時代

戦国時代になると敵からの襲撃に備える機会が増え、平時の屋敷（居館）とは別に戦時の砦として本格的な山城が整備されます。このころの山城は集落や交通の要衝を見下ろす山に築かれます。自然地形を利用するこれらの山城は、少ない労力で高い防御力を得ることができ、尾根の両側は断崖で、斜面を削り込めば切岸となり、尾根の一部を平坦に整えることで曲輪が築かれ、掘り下げることで堀切や竪堀が作られました。

戦国後期になると拠点的な山城は全山を要塞化した大規模なものとなり、山上に居住空間が設けられるようになります。

お問い合わせ
鳥取県埋蔵文化財センター
〒680-0151　鳥取市国府町宮下1260番地
TEL　0857-27-6711
FAX　0857-27-6712
ホームページ　https://www.pref.tottori.lg.jp/maibun
メールアドレス　maibuncenter@pref.tottori.lg.jp

在地領主の屋敷

南原千軒遺跡（琴浦町）

勝田川沿いの自然堤防上に築かれた平安時代末から鎌倉時代、室町時代の遺構、遺物が残る屋敷跡です。勝田川を背にして、L字状に区画する溝（幅2.5～3m）が設けられ、方1町（約100m四方）の方形館跡と推定されています。文献史料の検討から「勝田荘」に関係する可能性が高く、居館の規模や屋敷内で行われた鍛冶操業の様子から、勝田川流域の在地武士団、在地領主の屋敷と考えられます。

屋敷を区画する溝（SD７）
（南から撮影）

倉谷西中田遺跡（大山町）

大山山麓の丘陵地にあり、堀によって囲まれた鎌倉（Ⅰ期）、室町～戦国時代（Ⅱ期）の屋敷跡です。屋敷地は堀によって区画され、Ⅱ期には堀（幅約３m）を四方に巡らせ半町四方から一町四方に拡充されます。屋敷地内には掘立柱建物や井戸、墓が確認され、国内遠隔地や中国大陸から搬入された陶磁器類が出土していることから、在地領主の屋敷と考えられます。

屋敷の南辺を区画する溝（SD18）
（西から撮影）

山岳寺院を利用

国史跡　船上山行宮跡（琴浦町）

隠岐に配流された後醍醐天皇は脱出後、倒幕のため元弘３（1333）年閏２月 28 日から５月２３日まで峻険な船上山山頂の寺院に立てこもりました。臨時的な山城です。寺院跡は船上神社周辺で、土塁によって囲まれた区画が連続するもので、各区画に僧房など寺院を構成する施設があったと考えられますが、発掘調査など行われておらず、詳細は不明です。

北東から船上山の屏風岩を望む。▼は行宮跡の場所

船上山行宮跡　縄張り図

伯耆守護所の様相

山名氏館跡推定地（倉吉市）

倉吉市内の名刹大岳院の発掘調査の結果、上下２面の遺構面とそれに伴う多くの遺物がみつかりました。上層は近世の寺院跡で、下層は中世の掘立柱建物跡や井戸といった遺構や遺物がみつかっています。

『伯耆民談記』では、大岳院は「天正の頃、山名小三郎氏豊舘地」と紹介されていますが、下層で確認された遺構の年代はそれよりもさかのぼるようです。みつかった陶磁器類は破片資料ながらも、鳥取県内でも有数の多種多様な 15 世紀後半頃の遺物群で、守護職クラスとして遜色ない内容を誇ります。

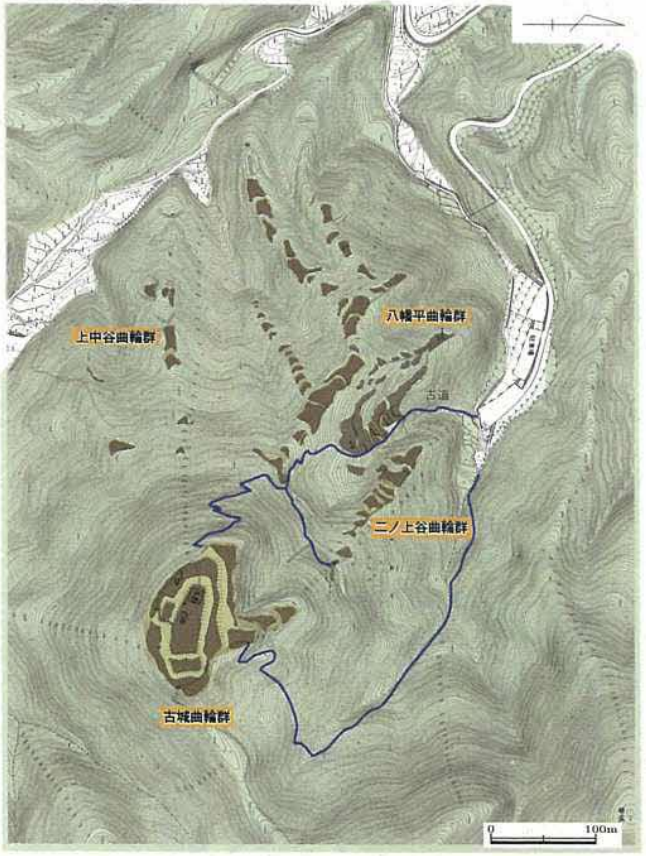
下層遺構の配置

本格的な山城

県史跡　羽衣石城（湯梨浜町）

羽衣石山に築かれた伯耆の有力国人南条氏累代の居城です。東伯耆で最大級の規模を誇り、頂上から延びる枝尾根上には曲輪が連続しています。古文書では、尼子氏により城を追われた南条宗勝が永禄年間にこの城を回復したとされ、その後、天正 10（1582）年に落城するものの、天正 12（1584）年頃には南条氏が城に復帰し、以後関ヶ原の戦いまで存続します。発掘調査の結果、主曲輪、帯曲輪で１６世紀代を中心とする陶磁器類が出土しています。

羽衣石所在城（十万寺）から北を望む
（提供：湯梨浜町教育委員会）



羽衣石城　縄張り図

主曲輪から出土した備前焼壺